長泉町・さわやかハイキング報告書

通算山行NO	個人山行（雪山ハイキング）	報告者	井上弘二郎・石和加代子	
年　月　日	２００８年5月5日（月・曇）		2万５千図	白馬岳
山　　名	白馬岳・小日向山（おびなたやま・１９０８m）			
体力度＝３・普通　　技術度＝３・普通　　藪漕度＝ない　　道標＝ある　トイレ＝ありり・猿倉山荘（無料）　　展望度＝ガスのため、あまり良くなかった				

展望が凄いはずだった、残雪の小日向山

コース　とタイム	下土狩４：００－御殿場―大月―諏訪 P７：０５－　豊科 IC－猿倉着７：４０―猿倉発８：２０－小日向山　昼食１０：４５～１１：２５―猿倉１２：４０―ホテルホワイトクリフ（泊）１５：００
標　高 差	上り＝猿倉１２５０m～小日向山１９０８m＝約６５８m 下り＝　　同上
参　加　者	ＣＬ・後藤隆徳、井上弘二郎、中村圭吾、永尾広、村上美恵子、石和加代子、ゲスト・加藤昭嘉（糸魚川労山）＝以上７名

地元の糸魚川労山の加藤さんと猿倉の駐車場で合流する。猿倉小屋からすぐに急登の林の中へ入り７人縦列で進むが、山スキー組がスキーを履く準備となり、登山靴組の永尾、村上、石和の３人は先に進む。

じきに後藤さんと加藤さんが追いつく。林が終わると、ガスがかかりながらも残雪の山がドンと広がっていた。雪解けの季節を迎え、山肌にいろいろなものの姿が浮かんでいる。

先日のテレビではちょうど雪形の話題を取り上げていた。いったいどの山が目的の小日向山かな？時間的に考えて真正面にそびえるあんな高い山のはずはないし…と考えていたら、すぐ左横にある山らしい。（杓子岳から東に派生する尾根上にある）しかしずいぶん回り込んで登っていく。

こんな広い雪原はどこから登ってもいいのが開放的だなあ。ただ前の人の足跡を追ったほうが効率的なようだ。まっすぐ上に向かって登っていく。でも下りの足跡なので歩幅が広すぎて合わせにくい。雪質はザラ目で滑ることもなく、ザックザックとつま先をけり込んでいく。私にはこんな上りは歩きやすい。一方山スキー組の加藤さんと、後藤さんは広い幅でジグザグに上っていく。時々パラパラと雨粒が落ちてくる。

ガスってきてせっかくの素晴らしい展望は望めない。時々さす日差しに期待をするが…いくつか回り込みながら小さなピークを越して、もう上がないのでここが小日向山の頂上らし

い。広いところで、40 分ほど昼食休憩をとる。

下りは上りにもまして自由だ。山スキー組は滑りを見せる間もなくあっという間にみんないなくなる。

永尾さんも山スキー組と張り合うくらいにあっという間にいなくなり、捜すとずっと下に山スキー組といっしょになって待っていた。その上、子どもとソリ滑りをしたことを思いだしたと言ってビニールシートで滑っていく。

すごいスピードがでるが、うれしそうにはしゃいでいた。私たちもドンドコ下っていった。

この山へ来た人たちはほとんどが山スキーをつけていて、歩いている人は２，３人しか見かけなかった。シュッと駆け抜けていってうらやましい。

後の岳樺が立派

加藤さんがとてもかっこいいフォームで滑っていた写真を後で見せてもらった。さすがに年季がはいっているのでしょう。どこを歩いてもいいのでサッサと下っていったら、水の音がして沢に出てしましそうになった。後から「そっちじゃないよ」と永尾さんの声がかかる。あれ、道を間違えた！それからは慎重に。人に会わないので、赤いテープを手がかりに（後藤講師から、テープがあるここまでは正しい道だ。迷ったらそのテープまで引き返すことと教わる）、雪についた跡を見たり、登ってきた道を思い出しながら下っていく。山スキー組に 30 分ほど（？）遅れて猿倉に到着。雪道は猿倉小屋の上わずかを除いてずっとだったが、アイゼンを使うことなく雪山登山ができた。加藤さんとは猿倉の駐車場でお別れとなる。（以上＝壷足隊・石和記録）

（以下＝スキー隊・井上記録）

猿倉の駐車場に着くと、急いで自分の荷物を車から出した。駐車場からはスキーをつけずに担いで登るので、スキーブーツ以外はザックに入れるか固定しなくてはならない。担ぐのは初めてなので、見よう見まねでやってみる。スキーアイゼン、シール、12 本アイゼンはザックの中にいれ、板とストックはザックの両脇にザックを挟むように固定する。なかなかカッコがよろしい。背負ってみると、うっ、きつっ、予想以上に重い。でもやめるわけにいかないので、気持ちを新たにいざ一歩を踏み出すことになった。頭を上げて上を見ると背負ったスキーの板に頭がごつごつ当たる。不便なもんだ。

しばらく歩いてやっぱりスキーを装着することになった。久しぶりなので手順を忘れており、中村さんに聞きながら行ったので、他の人より遅く出発するはめになってしまった（中村さん、すいません）。

すでに前を行くグループは見えず、中村さんと二人で登っていった。時折、周りのガスが晴れて雪が残る山々が姿を現し、その迫力に感動する。

一度小さな緩いピークに出るが、前を行く仲間の姿は見えない。時々「おーい」と呼びかけの声があるので応える。いつしか、踏み跡もスキーの跡も分からなくなった。人がたくさ

スキーはいいね～！！

左が加藤さん

んいるのが見えたので行ってみたが別のグループだ。やがて、はるか上のほうで姿が見えた。永尾さんが雪玉を投げている。そんなことするのは永尾さんぐらいなので、自分のグループだと確信する。急な斜面を登り、たどりついた所はさらに急な斜面だった。うまく歩けない。呼吸を整え気合を入れて足を出すが、５ｍも進むとまた立ち止まる。角度がきついとうまく歩けないので、角度を緩やかにして少しずつ登っていった。

その急な斜面を登りきったところで、さらに遠くで後藤さんが呼びかけているのに気がついた。最後にひとフン張りし、楽しい声の聞こえる頂上に到着した。ずっと自分の弱さと対面し続け疲労していたが、例によって取出したる魔法の缶の栓を開けて、魔法の液体を流し込むと、あら不思議、いつものようにきれいさっぱりと辛かったことを忘れていた。

下りはスキーだ。このために登ってきたんだ。今回は、前回の富士山と違い、コースの幅が狭いので正確なスキー裁きが必要になる。しかし、そんな技術のない私はすぐにスピードを殺し止まり、ターンしては加速してビビる、の繰り返しで下りていく。いやあ、こわい。林に入る前に唯一自由に滑ることができる広くて緩い斜面があり、得意の大きなターンを楽しむことができた。ま、山スキー2 回目としてはこんなものか。

前を行く加藤さんのすべりがきれいである。気持ちよさそう。ここで、はじめてみる光景に出会う。大小様々な大きさの雪の塊がゴロンゴロンと上から転がり落ち、我々の横を転がり落ちていった。中にはひとかかえはあろうかというものもあり、あれにぶつかったら危険だと自然の脅威を感じた。

林の中に入ってからも、道幅は木と木の間しかないし、斜度はきつい。ここでもビビリながらちょっとずつ下りて、なんとか駐車場に辿り着くことができた。

経験のなさを実感した。次は、もっと力強く登り、もっと華麗に滑って下りたいと思う。

以上

猿倉から下る途中で水芭蕉の湿原が目に入り、車から降り、しばし散策。その後青鬼（あおに）という集落に立ち寄る。白馬村青鬼重要伝統的建造物群保存地区になっていた。小さなプールのような田んぼが階段状にあり、近ずいて水面をのぞくと雪の山並みが逆さに写っていた。棚田は美しく、のどかな農村風景でした。ホテルに着いて、入浴。食事の時間まで加藤さんから頂いた地元の酒「謙信」を交えしばし歓談。その後テント組は野営に向かった。

観察した植物

水芭蕉（ミズバショウ）、坐禅草（ザゼンソウ）、二輪草（ニリンソウ）、片栗（カタクリ）、菊咲一花（キクザキイチゲ）、東一花（アズマイチゲ）、延齢草（エンレイソウ）、白根葵（シラネアオイ）、得撫草（ウルップソウ）、花桃（ハナモモ）

青鬼にて